

バリアフリー・ブック 目の不自由な人の心を知る本

# 朝子さんの点字ノート



文・河辺豊子

日本児童教育振興財団

発売・小学館

絵 大中美智子

企画 E&Cプロジェクト

協力 木塚泰弘（国立特殊教育総合研究所視覚障害教育研究部長）

田中徹二（社会福祉法人・日本点字図書館館長）

三宅三郎（財団法人・安全交通試験研究センター）

財団法人・アイメイト協会

社会福祉法人・日本盲人会連合

株式会社トミー

『朝子さんの一日』を読んで下さった読者のみなさん

装丁 佐々木多利爾

編集 日本児童教育振興財団

表現研究所

編集協力 大悠社

\* この本の朝子さんのお話の部分は、作者・河辺豊子さんが音声  
ワープロソフトで作成したフロッピー原稿を使用しました。

目の不自由な人の心を知る本

## 朝子さんの点字ノート

ISBN4-09-837302-5

1995年4月10日 初版第1刷発行

1997年7月20日 初版第3刷発行

発行者／中野早苗

発行所／日本児童教育振興財団

〒101 東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル 電話 03-5280-1501

発 売／小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話〔制作〕03-3230-5333 〔販売〕03-3230-5739 振替・00180-1-200

印刷所／町田印刷株式会社

©1995 河辺豊子 大中美智子 PRINTED IN JAPAN

・製本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送り  
ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

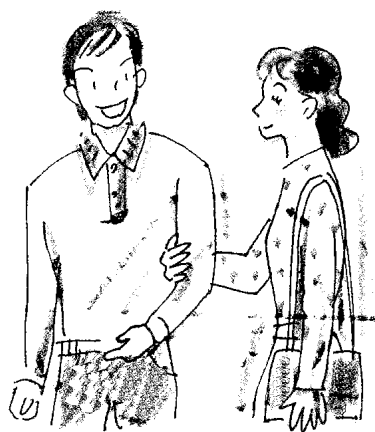
図<日本複写権センター委託出版物>

本書の全部または一部を無断で複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、著作者・出版者の権利  
の侵害となります。予め本財団あて許諾を求めて下さい。

・本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡下さい。

目の不自由な人の心を知る本

# 朝子さんの点字ノート



河辺豊子・作／大中美智子・絵

# この本をお読みになる方へ

一昨年、目の見えない人の生活を知る絵本『朝子さんの一日』を発刊して以来、たくさんのお便りを朝子さんあてにいただきました。感動的なお便りが多く、このような本が求められていたということが改めて感じられました。



ご存じの方も多いと思いますが、本書と同じ主人公朝子さんのある日を描いた『朝子さんの一日』は、<sup>せい</sup>晴眼者には推し量ることのできない視覚障害者の日常生活を紹介する絵本として好評でした。

さて、『朝子さんの一日』では、生活用品や道具、街の施設など、主に「物」とのかかわりから視覚障害者の生活を紹介しました。そこで今回この本では、目の不自由な方々の、外からはうかがい知ることのできない喜びや悲しみといった「心」の世界を紹介したいと考えています。



『朝子さんの一日』から数年の月日が流れ、この本の中で、朝子さんは二児の母となります。

もちろん今も、明るい、前向きな性格の魅力的な女性で、書くことが大好き。朝子さんは長年、その時々感じたこと、考えたことなどを時には日記風に、時には随筆風、短編小説風に点字でまとめてきました。本書『朝子さんの点字ノート』は、その中の一部を紹介したものです。

なお、この本の作者は、もともと朝子さんのモデルといわれる河辺豊子さんです。

また、本書の途中と巻末にQ & Aを設けました。視覚障害者の方々の役に立ちたいと心の中で思っている人は多いと思います。なのに、いざ、そういう場面に出会った時、とまどったり、ぎこちなくなったりして、結局心ならずも何もできなかったという人が多いのではないのでしょうか。

このQ & Aは、そんな時に役立つ視覚障害者への手伝い方の入門ガイドです。街でとつぜん「朝子さん」に道をきかれたとき、みなさんが「朝子さん」に喜ばれるガイドができるようになってくださることを願っています。

# もくじ

|              |     |
|--------------|-----|
| この本をお読みになる方へ | 2   |
| 朝子さんの家族紹介    | 6   |
| ハチ           | 8   |
| 早起き          | 10  |
| けが           | 13  |
| 日よう日         | 21  |
| 風邪           | 26  |
| ミミ           | 31  |
| みどり誕生        | 34  |
| 誤飲           | 41  |
| 発熱           | 46  |
| 露天風呂         | 54  |
| 火事           | 66  |
| 初めての散歩       | 74  |
| 保育園          | 84  |
| 再就職          | 89  |
| コロ           | 95  |
| 転勤           | 99  |
| おつかい         | 104 |
| 学校に行けない その1  | 110 |
| 学校に行けない その2  | 118 |
| ズボンなんだもの     | 127 |
| 学校に行けない その3  | 131 |
| バードリスニング     | 138 |

|                |            |     |
|----------------|------------|-----|
| <b>Q&amp;A</b> | 声のかけかた     | 64  |
|                | こんなときは?    | 108 |
|                | 障害について     | 146 |
|                | 点字と点字図書館   | 148 |
|                | 点字ブロックについて | 150 |
|                | 盲導犬について    | 152 |



|                 |          |     |
|-----------------|----------|-----|
| <b>朝子さんしんぶん</b> | 読者からのお便り | 154 |
|                 | 作者紹介ほか   | 156 |



|             |                 |     |
|-------------|-----------------|-----|
| <b>本の紹介</b> | 『「バリアフリー」の商品開発』 | 158 |
|             | 『テルミ』           | 159 |

# 朝子さんの 家族紹介

朝子さんのうちには、いつも笑い声が絶えません。  
頼りになる夫の隆さん<sup>たかし</sup>、やさしい長男の光くん<sup>ひかる</sup>、本書  
の途中から登場して大活やくのみどりちゃん、そして  
愛猫のミミ。みんな明るくほがらかな家族です。

なんにでもチャレン  
ジなくちゃ気が済ま  
ない朝子です。得意な  
のは料理。特に揚げ物  
には自信アリ。

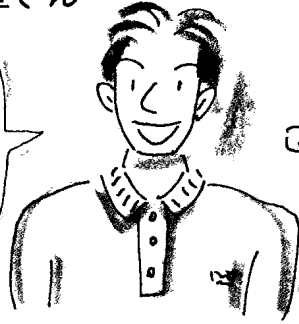
沢田朝子さん





隆さん

人からよくさっぱりした性格って言われるけれど、本当は繊細<sup>せんさい</sup>なのだ。



光くん

やさしい子って言われると、おとなしいみたいな感じであんまり好きじゃないんだ。スポーツだって大好きさ。



みどりちゃん

いつも、うるさいっておこられちゃうけど、お兄ちゃんが大すき。ミミとだってこんなに仲がいいの。



# ハチ

某月某日



光から会社に電話があった。

「お母さん、今日楽しみに帰って来てね」

何ごとがあったかと、受話器を握った私は、元気な光の声にまずはほっとする。

「大した事じゃないのに、電話をかけてきちゃだめじゃない」

声をひそめて、やわらかくたしなめる。

「うん、わかった。でもね、ミミがハチ、見つけて大さわぎするから…」

「またミミがつかまえてきたの？」

ついこのあいだ、ミミが外からトカゲをつかまえてきて、家中で大さわぎをしたばかりなのだ。

「ううん、ちがう。家の中に入ってきて、飛び回っててさ。大きなハチなんだ。僕も初めて見るくらい大きなハチだからさ、もし、ミミが刺されたら大変だと思って部屋にとじこめたんだ」

「あっそう、ミミをね」

「ちがう、ハチを。そしたら元気がなくなって畳におっこちてね、死んじゃったんだ。ティッシュにくるんで大事に置いてあるから、楽しみに帰ってきてね。だってお母さん、ハチ、さわったことないでしょ。飛んでるハチなんてさわれないものね」

薄い羽や、針を気づかいながら、そうっとティッシュにくるんだであらう、光の様子を想像すると、しかることもできない。

「はいはい、ありがとう。いい子で留守番しててね。お母さん急いで帰るからね」

と、受話器をおいたが、笑いがこみあげてくる。さすがに見えない母親の子だ。私がハチにさわったことのないことを、ちゃんと知っていたなんて…。



夕方帰宅。ハチをそうっと指でなぞる。きれいなものだな、とまず思う。胴がキュッとくびれていて、羽が薄く優美だ。

「ハチってきれいだわね。初めてさわったわ。ありがとう、光。これ、あした会社に持って行こうっと」

「えっ、どうして？ みんなハチなんて知ってるよ」

「あのね、うちの光がこのハチ大事にとっておいて、私にさわらせてくれたの、って自慢するの」

「ふうん、変なの…」

(私って親バカかしら)、ちょっと反省。

# 早起き

某月某日

いつものようにN駅階段をすたすた降りる。段数も踊り場の幅も毎日のこと、頭に刻み込んである。ホームに降り立ったが、何となくいつもと様子が違う。ラッシュ時のこと、ホームはいつも人であふれているのだが、それに加えて今日は殺気のようなものが感じられる。すると、「大変お急ぎのところ、ご迷惑をおかけしております。

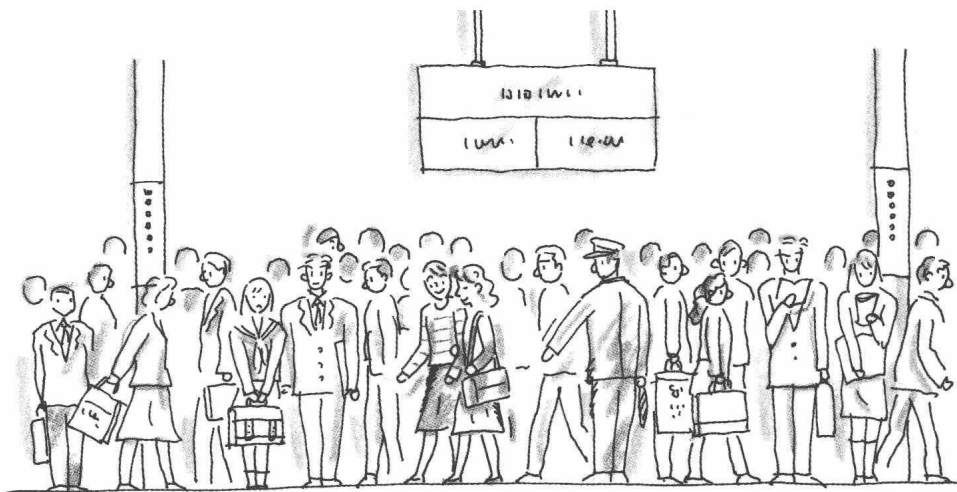
S駅で人身事故が起きまして、電車ダイヤが大幅に遅れております」

と、放送が流れた。

片づけたい仕事があって、20分ほど早めに家を出てきたが、これでは何時に会社に着けるか分からない。それよりもこの混雑ではけがをしないよう気をつけて行動しなければ危ない。ともかくいつものように点字ブロックをたどってホームの一番前まで歩こう。私はホーム左端の点字ブロックを探し当て、ゆっくり歩き始めた。

「あ、ちょっと待って」

突然駅員さんの声。立ち止まった私に、



「一番前まで行くんだったね。うーん、困ったな。ホームがいっぱいまで歩ける状態じゃないんですよ。事故があつてね」と、どうしようかというふうに、きよろきよろしている様子。

私は左腕をしっかり駅員さんにつかまれたまま、すぐまで待つしかないかな、と腹を決める。毎日乗り降りする私を見ている駅員さんは、何とか前まで行かせてあげたいと思ったのだろうが、この混雑では自分も持ち場を離れるわけにもいかないのだろう。とそのとき、

「あ、すみません。お客さん、前まで行きます？」  
と、私を引っぱって、追うようにして頼んでくれた。  
「ええ、行きますよ。いいですよ」

その女性は駅員さんの申し出を快く承諾し、左腕を私に預け、ホームのまん中を歩き始めた。

相変わらず事故の放送は緊張感をあおり立てるように幾度も報じられる。この駅は左のホームが主に急行、右ホームが各駅停車の発着ホームになっている。どうも右側に各駅停車の電車が止まっている様子。その女性に確

かめてみた。

当たり！ 殺人的であろう急行に乗るのはあきらめて、各駅停車に乗ろうか。早めに家を出てきたことだし。

「この電車すいてますか」

と、勇気を持って聞いてみた。

「そうね。座れないけど、ぎゅうぎゅうじゃないですね」と言いながら、列を上手によけて歩き続ける。初めての誘導とは思えないほどの巧みさだ。だいたい前から2両目あたりに来たころだったろうか、

「あ、席が一つ空いているわ。どうします、乗りますか？」と聞いてくれた。

有り難い、座っていくことにしよう。急行はいつ来るか分からないし。電車の発着の時間すら全く予想がつかない。私は好意に甘え、各駅停車に乗ることに決めた。

席まで案内してくれて、

「それじゃ、気をつけて」

と、その女性はあっさりと言って電車から降りていった。  
(すごく親切な人だなあ)

私は丁寧に礼を言い、シートに腰を落ち着ける。

一分とたたないうちに発車。この分だと遅刻しないで会社に入れるかもしれない。早起きは三文の得ならぬ早出は三文の得だ。空席に座れるというおまけまでついたんだもの。



# け が

一時、昼休みも終わり、仕事開始のチャイムが鳴る。  
部長と安原さんは外出、尾崎さんと中村さんは三階で会議。部屋には、私と太田さん二人。ワープロのキーをたたく音だけが、静かな部屋に流れる。

二時、けだるい空気。

(あくびがでちゃうなあ)

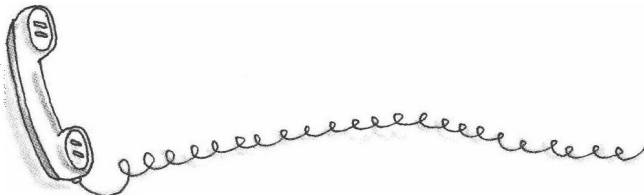
そのとき、そんな空気をつんざくように電話のベルが鳴った。私への外線。外線ボタンを押す。受話器からの声に、

「えっ！ はい……」。

手が震え、声が大きくなる。光が学校の帰り、通学路で自動車にはねられたという警察からの連絡だった。

「意識ははっきりしています。大したことはないと思うんですけど、こちらではよく分かりませんので、病院の電話番号をお教えしますから、問い合わせてください」

私は受話器を置くや、一階の公衆電話へ走った。



その翌朝。屋根をたたく雨の音で目を覚ます。五時半。まだ早い。隆さんの規則正しい寝息が聞こえる。ゆうべ、光は病院のベッドで寂しがっていなかったかしら。なるべく早く病院へ行ってやらなくちゃ……。

幸いなことに光のけがは軽かった。手指のつけ根の骨折と足の打撲。それに転んだときに軽い脳震とうを起こした、という程度のものだった。まずは一安心。が、そんなことを言えるのも今日だからだ。

昨日の私の気持ちをどう表現しよう。一体どこに包帯を巻いているのか。顔色はどうなのか。点滴<sup>てんてき</sup>をしているのか、いないのか……。元気そうな光の声を聞いて安心はしたものの、真の姿を瞬時にして把握することのできないはがゆさ、もどかしさは、どうすることもできない。

そして、何も考えずに初めての駅に降り、必死にここ、病室まで来たものの、全く勝手の分からない病室では、タオル一つ、コップ一個をも買いに行くことさえできない事実を思い知らされたのだった。

でも私は母親、暗い顔は見せないぞ。

「光、退院したらおいしいもの食べに行こうね。何がいい？」

いつもの食いしんぼう母さんの口調に戻る。

「わあい、やったあ。僕、トロ」

「うん。OK」





十五分ほどしたころだったろうか、隆さんも会社の仕事を切り上げて駆けつけてきた。

「おお、光。車とけんかしたんだって。勝てなかっただろう、やっぱり。ばかだなあ」

（全くこの人、どこででもこうなんだから。私の上行ってるわ）

脳震とうを起こしたことだし、大事をとって今夜だけ入院して様子を見ましょう、ということになり、光だけを残し、昨夜遅く帰宅したのだった。

今日は土曜日、隆さんも私も休みだ。これで雨さえやめば、光を迎えに行くのに言うことなしなのだが……。私の祈りが通じたのか、「雨を絶対やませてみせる」と豪語した隆さんの<sup>おど</sup>脅しが<sup>き</sup>効いたのか、十時に、病院に着いたときには、すっかり雨は上がっていた。

右手の包帯はまだ痛々しいが、もういつもの光だ。部屋の皆にあいさつをし、優しくった看護婦さんとも握手をして病院を後にする。

夕方、

「光、ここに座れ」

隆さんがめずらしく真剣な声で光を呼んだ。

「もう、お母さんに心配をかけるようなことはしちゃいけないぞ。それから、いろんな人にもだ」

「……」

「近所の人から聞いた話だが、事故のとき光が横の道から小走りに出てきた、ということだったけど、ほんとうにそうか」